

第28回 Kozoom28 テーマ「祭り」について

清水健二

我々の小学生の頃は国民学校と呼称されていた戦中や、戦後の荒廃期にはとても日常生活の中で「祭り」という思い出など無かったように感じている。しかし私は5～6歳の頃に初めて祭りに出会った記憶がぼんやりと残っている。私の母の実家は農家で、里帰りする母に連れられて、近くの神社の祭りや母の楽しそうな笑顔だけが二重写しに思い浮かぶだけである。この神社は、現在の大阪府富田林市太子町にあり、この地は王陵の谷と呼ばれ推古天皇始め古代天皇

陵が複数存在し、聖徳太子の御廟もある。奈良県との県境で山手には、6世紀に遣隋使として活躍した小野妹子の大きな墳丘が在って、その下に科長(しなが)神社が現存している。今も近隣の村からだんじり(山車)が数台集まって、鉦、太鼓の賑々しい祭りが繰り広げられている。山間地なのにだんじりの屋台は舟形で珍しい。



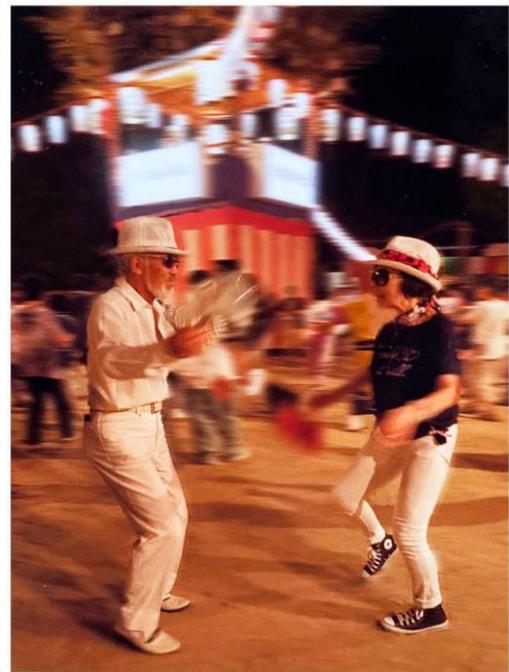
大阪 科長神社の夏祭り
舟形屋台のだんじりは珍しい

終戦後数年を経て生活が少し落ち着き始めた頃から、各地で郷土を中心に祭りが復興してきたように思う。しかし私は疎開していた田舎から大阪市内に戻って来た中学生時代や、高校に入ってから、祭りという行事には全く関心がなかった。高校時代に現在の八尾市に移住し、近くの古刹・常光寺が「河内音頭発祥地」と知り、夏の地藏盆には盛大な

夏祭りが執り行われていたが、私には盆踊りとか夜店の賑わいなど興味はなかった。

サラリーマンとして会社勤めをするようになって、仕事上各地に出張することが多くなり、地元の人達との関わりから、その地の祭りの話を耳にし、人々の生活習慣や祭りに関わった民話や寓話に興味を抱くようになった。日本各地の自治体が発注する環境整備のプラント事業の設計に携わった関係から、工事現場に出張し、時に逗留することがあって地元の人達との交流から習俗や信仰など、色々と見聞を広げることになった。昭和40年頃に秋田県内の仕事で、地域の人達との接触から、現場

で働く女性は黒い布で覆面をしていて顔を見せないのので表情さえ読み取れず、話す方言もさっぱり理解できず困惑したものである。それでもよく笑い親しみの持てる人達ばかりだった。現在、中東のイラン女性がヒジャブで髪を見せるな、顔を隠せ、隠すなと騒いでいるが、秋田の女性は覆面をとって50年は過ぎてしまった。生活の向上で古い因習から容易に脱皮する日本人の自由な思考は、なかなかのものだと思っている。仕事上、地方文化に触れることの多かった私は、随分刺激を受けたものだった。



大阪八尾の河内盆踊り
高齢者も激しい踊りへ変化



愛知 豊浜の鯛祭り
鯛の海入り

日本は四季を通して祭りが頻繁に執り行われ、地域にある神社・寺院を中心に祭りの行事が開催されてきた。神輿を担ぎ、あるいは地車を引き笛や鉦、太鼓で賑わうという祭りの形態は基本的に変わらないが、近年祭りは観光と娯楽化へと進化し規模も拡大し、花火を上げたりイベント化してきた。地域の人々と共に家族全員が寄り合っ

て楽しむ「祭りの心」が薄れて来ているように感じている。

日本が東海道新幹線の開通と東京オリンピックを開催をした1964年頃から、急速な経済発展を遂げ、1970年に大阪万博を成功させた時代から国民の生活は驚くほど向上した。それと共に生活に潤いを求め、芸術・文化への志向から、経済界はメセナ活動に積極的に取り組むことになった。企業が自治体と共に地域の伝統文化の発展に目を向け、町起こし運動の1つとして祭りの行事を支援したことが、祭り事業が巨大化した原因だろう。

神様を華やかな飾りの神輿に乗ってもらい、防御の鉾を立て、町を練り歩いて人々の願いを叶うような行事は様々で、神輿を担いで川入りし穢れを落としたり、海入して海難を逃れ



大阪四天王寺 どやどや祭
1月の厳寒期の裸祭り



奈良信貴山火祭り
山伏と一般の人達も火渡り



和歌山 印南祭り
神輿の川入り

る祈願をしたり、提灯に火を入れ霊を迎え入れたり、灯籠を川や海に流し、精霊流しをして亡き人の送迎をするなど、祭りは多種多様である。また火祭も多い行事で、古代より火の神を崇め、護摩を焚いて怨霊を鎮めたり、精霊の送り火として火には特別畏怖の念を抱いて来た。京都の五山の送り火、奈良のお水取りでは松明の火を浴びたり、火渡りして厄災を逃れる祈願は千年の歴史を重ねて来ているのである。

現役時代は日本各地へ仕事で飛び周り、古い習慣の残る地域に行ってみ聞かされたことを、定年後はもっとゆっくり知りたくて写真愛好会に入った。願い通り仲間たちとあちこち、時には遠出して祭りや遺跡などをカメラに収め、昔話を聞きながら楽しい体験ができたと思っている。

前述したように、近年の祭りはあまりにイベント化し、日本の3大祭である京都の祇園祭り、大阪の天神祭り、東京の神田明神祭り等を始め、東北のねぶた祭り、竿燈祭り、七夕祭りなど、各地の都市を中心とした祭りは本来の「日本の祭り」から遠去



伊勢のどろんこ祭り（御田植え行事）
「これ、お前のだろう？」



大阪八尾の節分祭（福豆を撒く）
河内の逞しいオバちゃん達



大阪枚岡神社のお笑い神事祭り
外国人も参加

かり派手でショウ化して来た。最近、大阪では「こいや祭り」や「よさこい祭り」等、他県の名だたる祭りをアレンジして、若者達を呼び込みカーニバルにしている。「祭」は「祀る、奉る」であるべきが、体育祭とか文化祭とかおよそ神仏に関係無い行事に使われているのは、いかがなものかと訝しげながらも、新しい芸能を編み出し、若者達をはじめ多くの人達が楽しめる

場づくりを展開して、文化芸術を育てる事も大事なことだと思っている。どんなに科学技術が発達しても、人が生きていくためには自然のありがたさに感謝する心を失わないようにしたいものである。

各地の祭を訪ねながら、撮り貯めて来た中から観光案内でない写真数点を選んでみた。そして僻地を訪ね素朴な祭りに触れながら、人々の無邪気な笑顔や、子供の健やかな成長を祈る親子連れに出会うと、ホッとするような気持ちになり、私も齢を重ねたものだと感じている。

令和4年10月 記



大阪城 こいや祭り
若者達の新しい祭り



徳島の湊柱神社の赤ちゃん土俵祭り
「これ、僕だよ」



滋賀の日野祭り
幼児の健やかな生育を祈願